繪本太閤記 二編 六

特
へ伊13
1833
子13

宮城縣立圖書館

帝國圖書館藏

特ヘ13
號1833
卷3

繪本太閤記二編序

帝國圖書館藏

古之為圖畫者必寫聖賢形像往事實以指鑒賢愚發明治亂興廢之故不徒藤閣雲臺勒勲績而已

漢武以周公輔成王之圖。
賜霍光。班婕妤觀古画。辞
同輦。明徳皇后見娥皇女
英圖。自恨不如。唐徳宗行
西宮。感老臣遺像。非若後

人任意師心。動輙托之寫
意也。若此編。寔可謂得古
人為画之旨矣。在昔豐
臣氏起于布衣。提三尺。平
定天下。以翼亮王室。遂

奮餘勇於異域。其勲業奕
〻乎其大哉。然而傳聞訛
舛。野乘失信。于是詳質
實。又圖而擬諸其形容。乃
可以指鑒賢愚。可以發明
治亂興廢之故。則其裨益
于人。不亦戔〻矣。書肆某
已刻其初編。行于世。今復
刻二編。徵序於余。曰書圖
畫之說與〻云。

寛政十年戊午夏六月

方廣殿吏伊丹上總介

賀茂宜顯撰

宮内庁書陵部

續本朝圖記二篇惣目録

壱之巻

加茂虎之助之傳

福島市松之傳

茂吉郎勇戦破阿阪城惣門

茂吉郎取多藝谷

茂吉郎智伊勢國平定

二之巻

茂吉郎計略陥手筒ヶ峯城

金ケ崎城落着

信長勢敦賀表退去
羽吉郎後殿軍配
羽吉郎破朝倉義景
信長帰城於岐阜

三之巻

加羽虎之助長浜外巡見
木村又兵衛上大九郎仕清正
石田三成仕秀吉
佐々木兼頼長光寺城新水之手
木下羽吉郎襲取稲葉城

碓氷峠勝家戦兼頼
信長江州発向
信長長浜三田村張陣
姉川合戦之始末

四之巻

羽吉郎破敵壮丹波守
木村又兵衛勇力
浅井勢悪敗軍
遠羽孫右衛門討死
横山落城

淺井勢倉責二于佐山城
淺井勢倉與二信長一對陣

五之卷

佐々木義賴與二信長一和睦
坂井右近與二淺井勢倉戰一二于田浦
長吉郎智波淺井勢倉勢
依二勅命一三家和睦
波柱丹波守降二信長一
毛受勝助返二取馬印一

六之卷

信長燒二比叡山一
義昭公與二信長一不和
信長上洛而囲二室町城一
三淵大和守討死
足利義昭公没落
岩成主税亮討死
中河勢平討二和田伊賀守一

七之卷

義永令二和波奪一妾
和波九郎兵衛降二信長一

虎御前山合戦
朝倉義景田沢山退陣
朝倉家勇士等討死
朝倉義景亮期
義輝断命而全探
信長大軍囲小谷城

八之巻

浅井長政亮期
羽柴吉郎到来拾高次館
三好義次亮期

今川氏真属信長幕下
柴田匠作麦落板津口城
羽柴秀吉攻落河内口城
惟任稲葉攻落鷲尾山嶽鉢伏城
信長安土山築城

九之巻

勝家與秀吉爭而曰忠
羽柴筑前守閉門
竹中重治演附冥
松永久秀謀叛

信貴山落城
森傳仆怪異

十之巻

秀吉播州出陣
別所長治敗信長
秀吉圍三木城
秀吉責落鹿口城
加藤喜明素性
中國勢囲上月城
光秀備執拒上月後詰

熊見川合戦

十一之巻

秀吉上月表退陣
山中鹿之仆義死
神吉志賀多城落敗
荒木摂津守謀叛
別所治定討死
秀吉丹生山焼兵粮
滝田直家乞属信長

十二之巻

竹中重兵衛砦
三木毛利両勢襲谷大脇砦
伊丹落城
三木落城
秀吉築摂州姫路城

繪本太閤記二篇惣目録終

繪本太閤記二編卷之一

目録

加藤虎之助之傳
福島市松之傳
藤吉郎勇戰彼阿坂城惣門
藤吉郎取義公谷

羽柴吉郎智伊勢國平定

帝國圖書館藏

繪本太閤記二編卷之壹

加藤虎之助之傳

君子の身を小なりとなべく大にしてまの志いよく屈し能く伸韓信胯下の辱を受け張良が履を進むる謙あり衛青い猪と牧とゑの奴なり樊噲い狗を屠輩なり人と用ゆるい事能用ゆるがおゝ〜すゝ朽をゝて連抱の材と棄るゝ事なれば小田彈正忠平信長人と用ゆる大度あり尾州中村の土民羽柴阿弥が子木下藤吉郎と用ひて今川義元が大敵が桶狭間の一戦に破り美濃國に乱入して敵藤龍奥を討ゝ〜初軍を挫けゝ依ゝ木兼復氏追ひ三好の剛敵と碎き其外勢北よりひく安濃津神

豊臣家與業
勇士之像

青山新七
河口久助
日比野六太夫
長江半之丞
勝須賀小六
稲田大炊
加藤虎之助
福島市松

加次田隼人
松原内匠
堀尾茂助
朝野永政
庁利助作

戸を降し其身尾濃の両国を領し兼ていに帝都のも護
と〜為天下の政務を掌り給ふ英名海内に振ふて悪くも
本下為吉郎が方すより出でり理りなるを秀吉公絶て
も已海を平吾〜天下を掌握〜給へ供奉の給りめへ
び誰うと〜歓対〜く頭を垂つゝ申て悪く天の助け
ありて尾のごと〜解け苔のぎ〜敷〜草に風を加へるごとし
其真業をたとる臣も誰〜ぞや勝須賀小六日又十郎
稲田大炊助又彦七日小又河口久助日比野六左衛門江
守之悪加次田隼人松原内匠堀尾茂又朝野弥兵衛
等こそ一人当万の勇士なり軍中其名天下に高く響き
遠く異邦に鳴りめい加藤虎之助福島市松行相助能登

に並ぶ者なし〜抑加藤虎之助清正が素性と謂るに大膳
冠鎌足公の苗裔左大臣恵名公利仁将軍の後胤武間に
零落せるを敷代に〜芝も尾張堂智郎中村に住居
せし親治左五郎助が一男にて秀吉の母方の亜従弟と
秀吉の母い拾荻中納言保簾卿の息女なれども其母い
備師治左衛が娘なり虎之助が父と秀吉の母とい民間にて
の親〜き縁身之先に為吉郎須賀に嫁を築さまの嫁と
ぬ〜時父母親族を拓に多く彼又郎が一子虎之助その
と年十三歳生得剛勇大膳に〜く細の〜に拓ら度本下為
吉郎が出身を尋〜ぬ〜て武勇に仕へ勇く強
働さをなさんものと日比日ごろ郡の居に世附須賀より

加藤虎之助の傳

羽吉郎が拙くをうしきうたるうひ五郎助主の婢の中村より尚り
ぬるぐも虎之助い羽吉郎が拙きうたるひ須股よりて越きけれ
羽吉郎虎之助が生質勇しくして恵なるに成雲し城中よりでめ
美濃の浪人竹中半兵衛重治を師として軍学刑部と学ま
せるふ其七智辯よ秀で竹中も之を愛し我及ばうるうを
とう威敬をとれるう度こたりうう行相助作とうう者あり其先
清和源氏にして美濃の国主佐枝藩の流なりしが
無羽ぐ為よ氏族とぐ自滅し助作も齢巣にして子よを
生母よ抱き源氏山林よ多び居りうれが年経て後木下
羽吉郎須股生城の節彼母子を尋ぐ不便のうるひ城中
よ使へ呼り書簡をうるよ其小児生得よの尚なりうひ七智最

よ越しうが来れのもしくつまりうふ果して秀吉の眼力よ
遠ひ後市之正貞元として豊臣家柱石の臣となれり人い
其若冠の紛れを見て後年の忠勇を知れべし助作が
軍学の師い須股川のかさりうよ独住する七年よりう豊
たり此七年よい元来明の頼州の人なりうが幸ありて日本
よ来船し毛利家よ仕へりしが不幸にして多用ひられど捐
ぐ漂流して多美濃の国よ来り住を此人軍学兵書
の有よ悉しく助作是が門よ入て兵書を聴陸法とるふ
武財七年よ助作よ語りうるハ汝が主人木下羽吉郎眼中
重睡ありて其光り人を射る今小身卑賤なりとうへども
終よハ天下を掌よとべし汝忠を盡して後業を後ざし

其二

とゝ助作この府十に歳なりるが世言伝て是きゆに恥し
涙服の袖よ沒つて加茂虎之介世ゆを物語りを虎之助と
安くさ於ゆもあんなりて強て問ど其へ恐るゝ助作倒
のごゝく彼七ちまゝが弟よ紛んとて其村にゆもりるゝ加茂虎
之助よ紛あひう助作河内けいゝ虎之介何方へ越きて歟や
虎之介答へゝ汝が師七ちまゝが弟よ紛てきのゝ汝が物語りせし
ゆの実なりや偽やを糺ゆことを糸りゝ助作腹〳〵き
事よゝ人ども押えゝて問べきにもあゝ〳〵師よ逢て汝が知ゞ
とゝひ助作い七ちまゝが方へ急き紛虎之介い涙服の方へ沒りる
世府虎之介十六歳之叔助作い何心なく七ちまゝが方へきう
えゝ〳〵いゝた師匠七ちまゝ肩之犯ゝけさゝゝ涙服よ切ちる

えゝ鮮血涙よなぶれ来よ死〳〵ゝう助作去きた紛天
〳〵是必虎之介が不ゐちゝ〳〵遠くい紛まで追ゝけて只一討と
表へ出ゝく見てゞゝが加茂虎之介以前の村にゆ二王ゞゝてを之
居ゝう助作ゝれゞゝとゝゆ紙あげてを拍けゞ虎之介怒ゝく
ゝう戻ゝう七ちまゝが家て来る助作虎之介ゆ白ひ汝今我師よ
逢ゝく物語ゝせ〳〵とゝひ〳〵ゆ宴よ来てゝれゞ世ゞゝく〳〵ゆ殺せゝれ
既よ幸ゝれゝう何者の不ゐちゝるや汝ちゝゞゝゝゆあゝゞゝゞ
ゝよゆ是必汝が仕業ゆゞ〳〵いゝる恨ありて七ちまゝを討ゝるや
其ゆ細とゆもゞ〳〵師匠の敵其席を立ちゝゞと力よゆ紙ゝけ
法ゝせゝう虎之介助作をちゝさと白眼敵討とおこゞま〳〵、
七ちまゝを殺〳〵ゝるい推量のごゝく某が去ゞゝう心をちゞめ

後藤市松の傳

我言葉さくべ〜汝も我も等〜く主下が家臣なれば忠義とは
心も又等〜くべ〜今天下惡く乱逆國〜の武將まで爭ひ別い
弱を征〜小い大を滅せ〜る其為ところ不ハ皆天下を掌に握り
四海の主たらんを欲を欲ず小田信長卿義昭公にそうん
ぐ國〜を征〜絶ん天下を吾と斗為ん其為下に敵主下
義右郎は天下を知れべき相貌ありと信長卿の望〜ごこと
よろこび給ふべき悪を為べきの絶ん主人主下反信長卿は
悪悪まれ之身の妨げとなべ〜我是とも方は七ちまが舌の根
をこゑんこゑ一刀は切殺せり私の眼ありて殺〜べきは〜
されども我を敵なりとて此場にて討ぞ我命ハ主人
のねがこそ捨ん汝が力拙つ之場は助他

大さに感心〜玉極の格論我甚ざ誤まり君のるみ身を捨る
い我も見下はおろまじ相まは隔心ち〜諸〜も忠義と是を
とべ〜と両人ともは心とけ打解ん〜涙股の堀へ降り日を
經て義右郎此事を虎之助他人を近く拒絶汝者い
まざ年の身〜て忠勇の志深く我は抑ひく涙見せり
両人が生先こそたの臣なれと〜感称〜扨此後は某
をいふ嗤る者ありとも其後は捨置べ〜死生命なり
富貴天はあり我実は天下を知れるべき猛あるべいふ云ひ
さまざる者ありとも志を遂でやはあるべき一小人の舌既は
さへられ中道は慶まるは天下と知る業にあり此後心と廣く持
べ〜とさと名れが両人其大量と感心〜感心服〜うり

孤児市松之傳

本下総古郡いまゞ足柄と称してあり」附武村里を往々小奥しげなる楠原の内に二歳斗の小児の腰にふとき索を付石臼乃大なる石臼を付うるが彼小児此石臼を物の数とせざるひきずりて這まわる程其怪力を見て皆此家に彷徊来りて此小児をいたわり扶節の繰り物なども心をあて送る人もなしが彼楠原彩右衛門夫婦彩吉郎を養くらやうひ豆人のごとくりて成る此小児名を市松と呼で其力あくまで強く骨太く長ずるに大食して酒をこのゝ大膳不欲の荒童なりなれば近隣の男女大人共迷惑何とも足い世よりて入る鬼ゝ如くして拙なれあつて市松七歳の時はゞ村なる小児といさうひをなし拙のごとく

迄五歳も長せ〜者を大地へ打付足を上て踏付々れい所ようおびゝしく奥るゞれ嗅きさけぶ拳をふてつく叩き打殺さどんが止ぬと罵る々彩吉夫婦迷ひあいてふさめき漸に使ひ傍り歳に似合ぬ大膳の彷快なりとさまゞ打猛なる〜々れごころよおれの方に以の和に憐り此まゝていい海ともゞ此所殺人へ訴へ急度糺明なべ〜と怒り々れが彩右衛門夫婦大に心を痛めつゝ〜と中宮内河岸〜流々る隣家の者寄集り小児の母の流言に免じ法師に海〜の人ゝとともぐゝに絶あつからず〜てる海うり扶も彩右衛門夫婦も市松が不欲のふるまいに心を苦〜め此児の生立ても楠原に業ととる者あ

あるゞ武家に奉てくとなるゝが自然る名誉をなるものなりん

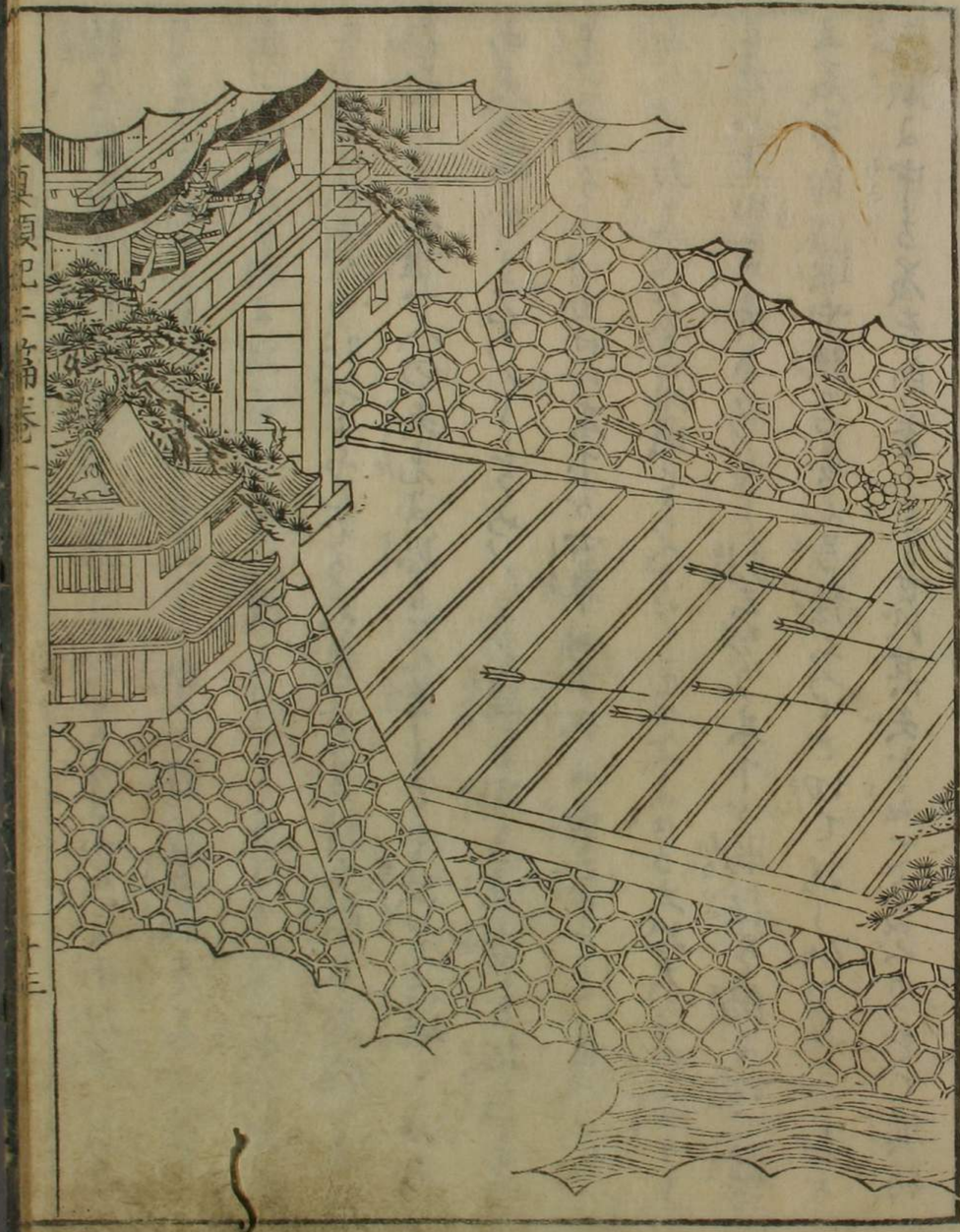
其二

〻く夫婦お供を宮ゝ彼長吉郎奉仕市松を堅〻防ひ来る
び出人を教まんと其来る紙結るれど出府本下長吉郎須股又
岩城を築き自他のゆゑ付くつまなく彩方へも寄る
つるれが市松を使ひ須股の城へ赴き長吉郎よあひて去う〻く
のよう物語り武家の奉公を教へるれば長吉兼く市松が勇
みる紙無量〻るれが大よろこび市松を城中へ召長吉も所中
寄る湯が勇ゝ〻〻双郷兵学を教へるふ出蓋の支あり て絶
福島左衛門を支正則〻て豊臣家の柱礎〻あり藝州廣島の
大守〻なり

長吉郎勇戦破阿坂城攻門

永禄十二年秋八月廿日信長卿勢州を征伐せんと大軍と
發〻尾濃の勢七万余騎併勢隠岐さし〻く進発を本下長
吉郎ハ去年より帝都の守護代〻て都よ留り居さり〻ば
信長卿今度の合戦本下ゆ〻〻〻〻勝利芳来る〻て織田
御長九位久間信盛村井民部林佐渡守佐田所之助等又人
を上洛させ長吉郎よ代ら〻り出陣〻ゆ其日ハ楽
名よ着〻ゆひ月廿六日阿坂の城へを〻ようせ関を作つて攻なふ
此城を守る大和い勢小勇一の勇和大宮入道含恵斎嬬る大〻恵
系連次男九兵衛尉之等総よ一よ余人籠城〻小田の大軍
と防んと矢石紙結人〻結居さり信長の先陣本下長吉郎
かぶとの勢八百余人ごろと喚く城際へ押寄る支二度三度攻上
る城ゆ大宮大〻恵い近代支双の精兵〻て要門の搦よ上り近よる

義右郎勇武
阿坂城の
搦門と
破れ



敵をさしたる引詰矢つぎだやゐ射うるふゑよあだ矢いるう
ろうさしも勇さゐいさんぐる本下が勢記勝の者教をもつぐ大之
悪一人が矢さゐよ射ものまさん進ようゐてゐくうろ義吉郎ゐ
をゐくく大ゐいうりがぐさふんだろ大青うて弓射る敵も教経なるう
ゐ勢なる死唯一人の矢先よ恐ゐゐ若くくも攻口を退くうのゐ
あゐきやかくもやくくもちめくくと扇を開き味方を招きまつ
先よ馬をうけ出せば本下が士卒此下紛よ勇者とは云いく
変うて攻よれば今い此城こらくぐくゐくよろる大ゐ悪安うう
どちひ大の尖矢きうくくと引ものり本下が胸板を的よ切て放つ
ゐ義吉郎が運や強うるゐくんう弦うくと切て射くひうう義吉が
る股よ中る義吉郎幸くもせば其矢とゐてうるがうもて項羽

樊噲が勇を羨くくなんうる城戸をおぼうう一日よ乱入を城兵
さんぐゐゐ乱ゐさるゐ討るく者森のごと本九へ引籠二の城戸
と固めて防ぎ戦よ信長これをゐく明智光秀坂井右近森
可成等よ命じ急よ日方より攻討くむ是よりいく城中大
きに苦くくゐ大ゐ合悪所一族を集め計策くろい云ゐよこの城
こらくいぐうも笑へ作くぐ玉砕乱を竟めくく合戦くうぐらに士卒
のゐよ命を落さんより係つて信長よ降参くく対面の射拒く
つて指ちぐ冥途の供よ右はこれゐばいうだうる嫌くうん海苔い
ふ石ゐあうやと弱ゐれば皆一日ゐ此計と苦とし九ゐ湯ゐ
矢倉よより降参のよくく味いうるふ信長先ゐゐ語弾正が係
いく降参せくぐくこれもゐ係うゐべくく只一りこよ攻たぐせ

と雖軍勢多下知しゝかを諸花臣皆法めて城内力盛て涯を
元君是を宮〳〵法ハどんが勢州一国の城〳〵皆降参る着カく
思死もあ〳〵戦ふ〳〵拙る附い容易く征伐ハ〳〵難〳〵
仁義をなて術なあ〳〵〳〵と申さるれば信長卿も元の国〳〵大宮ば
降参状賞〳〵の附き羽柴吉郎信長卿の私語て申るい若乃
賞禁のお〳〵大宮父子の降参実ていあ〳〵〳〵若も法ハく
降をゆ〳〵大和の国ゝて死絶をよへ虫ゝ彼国へ送り者〳〵道ゝ
く諸弊〳〵法ふ〳〵と申さるれば信長卿我も左こそ〳〵ふ〳〵
〳〵て大宮父子一族十余人信長卿の対面ち〳〵虫ゝ大和へ送く
ば〳〵と送りの武士是を伽是と大宮入道業てお遣〳〵をど
く大和へ送きるるそ力士数十人大宮を結受悪く搦め捕

密ゝ首を刎ゝる信長卿今度の城攻庶下ば武勇衆ゝ越〳〵
を大ゝ感〳〵法ひ秀吉が阿坂の搦門を打破り〳〵勇壮いふ
〳〵へ羽柴筑三郎義秀が鎌倉御所の南門を破り〳〵ゝ
おるま〳〵〳〵く源く稼美〳〵ゝひる

羽柴吉郎取多羅谷

扨も信長の大軍国司の本城大河内ゝ押寄十重廿重う
元圍ミ息をも絶ぞ攻さるる元来此城究竟の要害ゝ
国司小島異教入道不知哀息男左中将信意次男長野
次郎長教を主将〳〵て一族郎等三万余人堅固ゝ籠城
ちさるるれば左右なく攻落ち〳〵ぬ事ゝ〳〵るるさるれ
大軍なれば新手と入替攻る程ゝ為計ゝ惣三郎

義吉郎
多藝多能

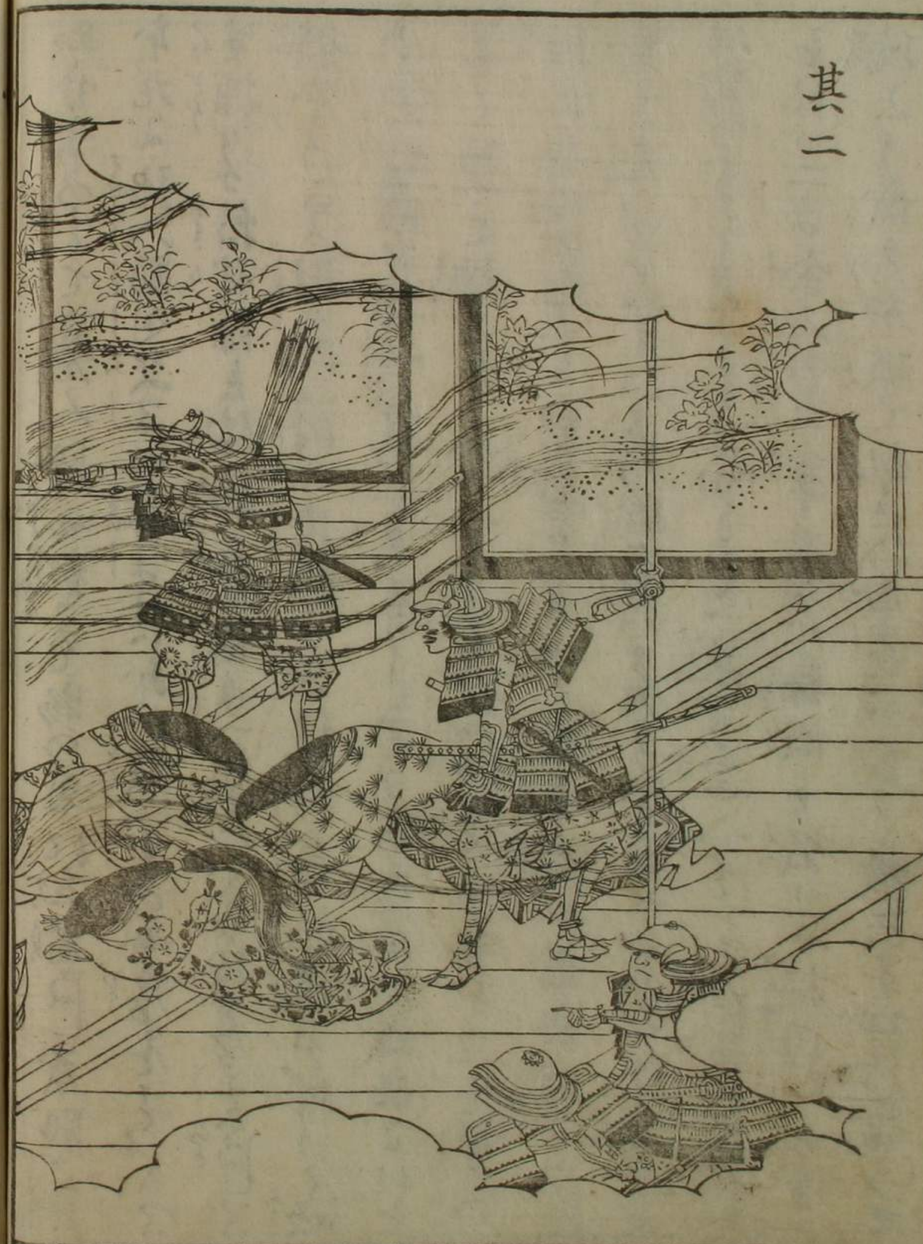
延輝が攻口搦手の方を柴崩し絶み換軍城のみ廓と攻
ちう囲の軍勢ハ二の丸ゑ搦籠すきびしく防き戦ふ程ゑ
宴ゑて数日勝負のえも見久ざる有ゑ八田の城ゑ籠うゑる搦
七郎左ゑ尉正奥寄斗を以て信長の本陣を疾討し大きゑ
小田の軍を強し多れば寄ゑも今い攻あぐんで見へ見り宴ゑ
押ひく本下義吉郎一計を施し多藝谷の城を奈ゑんとした
拾此多藝谷とゑるも大河内の本城より東南ゑ当つて陸路の
山あり其ゑ山のすゑゑ城を構へ絶頂ゑ觀をりふけ左ゑ滄海
濃くくして沖のかゑ花ふゑ多るさゑ〻画きゑせるごく右い
俄くゑる岩蛮ゑ松栢いや源く生ひ繁り猿麻の峰寄ゑ勝と
彩勢小舟一の系地ちれば囲ゑ入道石知毋拾ゑの別業なり

志ゑも要害堅固ゑして防ぐゑ仮ある城地ちれば囲ゑ父ゑの
妻女一族宗徒の女房達小児老人を此城ゑ籠居大河内宮
内少輔森本孤彈守両将二ゑ余人ゑく先と守護を本下
義吉郎此城を襲ひ落し囲ゑ父ゑ一族の妻ゑを棄ひ石
んと十月廿三日の夜約束弥兵清堀尾義助ゑ宛意乃兵
士五百人を引率せ〻向道ゑり進んぐ彼城の右ゑに寄り
ゑ火ゑ放ひ登り焼苦を用ゐ〻て射射の石ゑると待せ
盗其ゑ外ゑ勢二ゑ余人本道ゑりもて龍義居ゑの尾茶ゑ
自然先ゑ進んぐ上りるゑ廿四日の暁城の退ゑの堀源う
ゑり一度ゑ鬨波を上うりる元来此城陸路と軍防戦の
使もちうぐしうざるゑ此程小田勢も退屈し三ゑ

墓〻ちと見合戦もあるべきなれいよ〻〻とうり城やうまく侵入る
る儀よ囲者の心若よ寄見敵をや搦よて攻よせるべきをいこ
そ敵の寄るぞ防矢村よ鉄炮よ玉薬ようとうろうへ強ぐ
の大方たるべ大和大河内宮内お捕森本兵弾当る士卒を
制し拾見固め弓鉄炮を打出し寄を破らしぐと防る
本下義吉郎態と急よい攻よるべ空鉄炮をるし囲と外り
大軍一度よ攻よる形勢を知るふ勢原く立藪ひすよ人
のるも見人まるべ城兵悪く此ものあまり味方を助け防ぎ
る此附勢弥兵衛堀尾義助退よの方よ囲の者寄きる
とび附かいよと五百人を二手よ堀尾義助二百又十人と
引て搦手より城中よ乱入るよる兵士一人もなくなく

出合ふりのとて い老人婦女数すて物の用に立者共義助が勢
本九よ乱入囲可矢るの妻る其外一族どもの女房をとぐく
生捕る勢附弥兵衛堀尾が搦手へ乱入ると見し
彼勢ふる樹木へ一附よ火付さしたれば打前勢崩きび〻〻喚
く黒煙城中よ火抱ちをざま〻きるえん方共城兵これと
見くらいて強ぎ本九へ入んとをしたれば堀尾義助本九を囲め
鉄炮を雨のごと〻打出せば〻〻ぐ〻囲章強ぐ城兵肝をちし
魂を失ひるのまひ見の踏本見まくど本下義吉郎拾ひる
此火の手を見くをい今こそ一息よ楽入よと乗配退元下知
をれば二る余人の軍率大きたに薙波を殺〻旋風のごとく
攻よる城戸を破て乱入囲者ふさめく城兵を切伏薙ふせ

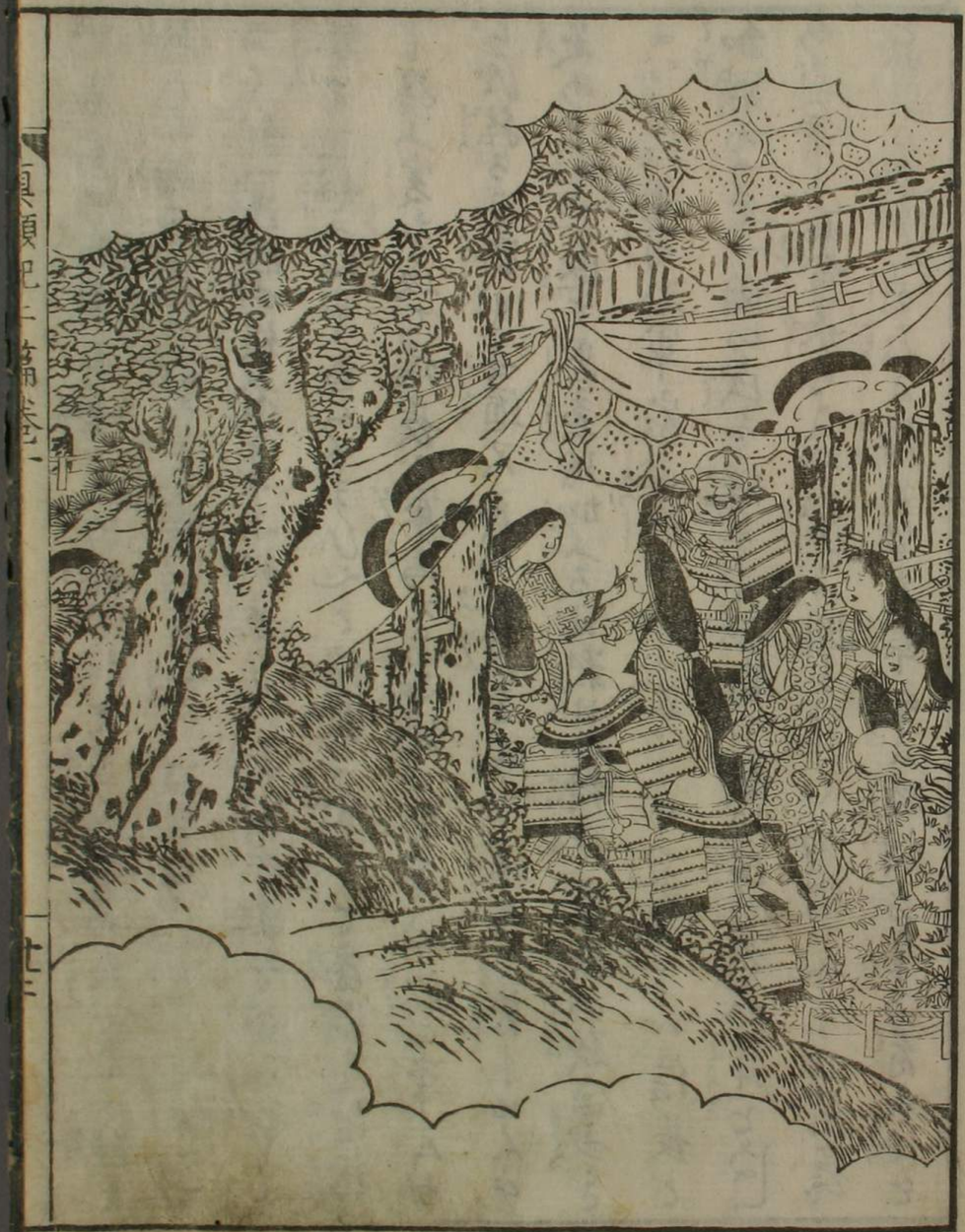
其二



遁まんれいをねる大河内宮内少輔森右衛門守ちうく道を求めて逃出る木下藤吉郎久よ入くせ捕を義ふるふ老若婦人都て三十七人藤吉郎勢地姫尾よ城を守らせ自生捕を引つ連信長卿の本陣へこそ急ぎける

藤吉郎智伴勢國平定

木下藤吉郎國司父子其外一族等が妻子ども生捕本陣へ参りければ信長卿大よろこびあり藤吉郎を近く召寄勢州平定の深を問ふよ藤吉郎謹でヤるハ北畠と力をん争んよ実よ芝労して功よきたり今生捕不の婦人三十余人を悉く城中へ送り申し此席よ威を立して和平と説ば國司をたぶめ小畠一家の者皆君の寛仁よ服し忽ち勢州平治もぶ〳〵と信長是よ驚ひなまひ不破河内守菅の谷九右衛門両人を使者として彼生捕を石連大河内の城へ送る勢州の國司異教入乃父子其外の一族等多藝谷の妻子を欲よ棄ければ大さに驚き城中騒動大方ならぬ此時信長より生捕の婦女を送り来り國司よ對面して一言とヤさんと味わりければ異教入乃再び驚き先妻子ども逃るよ功るをよろこび城門を開きく使者を招き對面して信長の趣意ぶ〳〵不破菅谷ヤるハ此度味方のお士多藝谷を襲ひ國司一家の妻女を生捕人質とおして戦ひんと長芝信長が心よ〳〵ぶ〳〵ぶる今ヤ悪く芝を送つて信長が本心を國司よ告ぐ招信長小畠の一家よ對し私の眼色紛くも



義吉郎
伊勢の國
平定

ゐ軍家の古命を令〜三好と討て足利を再興せんと欲と
ゝ雖るゑ國司父子居ゑゞ〜勢州を外〜ゐ軍御上洛の扶助もと
ゑく劉〜御恢の使者をゞふ列素せゞ足ゐ軍家を蔑如ゑ〜
奉る三好ゑ国ゞきゐるまひと信長ゑ令〜て當國を征伐
〜給ふ實を以て信長ゞ軍馬を當國ゑ加ふるゑ私の事ゑあ
らゞ雖るゑ御も無道不義の合戦をゐ〜軍民と苦〜ゐんゑ
是あゝんや退て思惟ゐ様加ふるゑ数日の對陣軍民の欲きゞさ
ゑ〜ゞ國司ゐ軍家へ出仕をゞふゐ〜ゑ者ゐ〜ゞ信長と
和睦ありて一國の民を保んゞ〜小島の家城治め長久の計とな
ゐゞ〜右令兼ゑゑ地ひくい圍を解く攻國をゞ〜ゑ信長
と勢を爭ん不ゐゑ侍〜ゞ大軍ゑゑ攻討令命の旨ゑ任を
ゞ〜此両条よゝ〜思惟とゐ返答兼ひゞ〜と演けき
ゞ奥教入道一族宗徒の者ゑゐ議〜て信長のゑ息の内を
人信長の貴ゑゑ給〜ゞ以後親族とゐ〜て両家の策と彩ん
と返答〜ゐゐゞ不破菅谷の女士城を出て信長ゑ此旨を
達と依ゑ信長の次男茶筅丸を北島の養子として城中へ
送り両家の和平調ひ〜ゐゞ方の圍を解く攻陣の儀〜
とゝぐゐ雖ゑ國八田の城を楠七郎左衛門尉正具ゑ
先ゑ謀計を以て信長ゞ大軍を退〜ゆ事編ゑ此度も攻討
をゐ〜て本陣を開〜ゐゐゞ國司と信長と和睦調ひ〜と
雖信長ゑ〜を深く悪と給ふんゑを恐ゑ八田の城を捨
撫州石山本願寺ゑゞ越さる信長ゑと雖て大きに怒り

楠正具我軍を強とゝの度くなれども國司と共に降参せい
合戦の羽ひ勝敗をゝて眼こを紛とゝの臣子細なく親しむ
ゝ臣と剣へ本敵寺に属ることそ寄怪なる迄よ〳〵已
正具本敵ゝる諸ゝもに勢のおゝ〳〵拾んと怒り給ふを紫
田丹羽木下明智さま〳〵宮め来せ無軍をまゝめ先糸
都へより給ふ國司父子も末途まで送りまゝ〳〵せ月出度入洛ゝ
しあひ月十一月十三日本國英濃ゝ帰城あり

終

繪本古閑記二編巻之一終